

『青鞜』初期における平塚らいてうの思想

—「元始、女性は太陽であった」を中心に—

顔 理謙

(台湾大学日本語学科修士課程二年生)

一、はじめに

明治四十四年九月(1911年)、平塚らいてうをはじめ、中野初、保持研、木内錠、物集和らによって創刊された雑誌『青鞜』は、日本最初の女性のみによって編集された文芸雑誌である。発起人、賛助した女性作家及び社員がほぼ二十代半ばから後半までの若い女性であることで既に注目を浴びたが、明治四十一年の「煤煙事件」で報道された「禅学令嬢」らいてうはメンバーの中で最も注目された人である。

らいてうは日本女子大卒業前後に禅と接触を始め、一生を通して禅の精神を実践したと考えられる。特にエレン・ケイの思想に接触する前に、らいてうは自己探求に専念していた。内的世界への関心はこの時期におけるらいてうの思想の特色である。

本稿は、禅の立場から自己の内的世界に関心を持っていたらいてうの体験や思想がどのようなものであったかを究明したい。

なお、本稿では『青鞜』三巻一号(大正二年一月)の「新しい女、其他婦人問題に就て」と題する特集以前、つまり創刊号(明治四十四年九月)から第二巻十二号(大正元年十二月)までを初期とする。

二、『青鞜』創刊前のらいてうと禅とのかかわり

昭和8年の随筆集『雲・草・人』によれば、女子大学を卒業する前のらいてうは「神経質で、臆病で、孤独すきで、人と口をきくのがひどく嫌ひといふ偏屈者」であり、講義に出席するより、図書室や自分の部屋で本ばかり読み、「今考れば呑気な、併しその当時のわたしにとっては全生命を打ち込んだ最も真剣なことだった所謂人生問題、信仰問題のためとりとめない懐

疑に陥って苦しんでみた時」であった¹。

人生問題、信仰問題に苦しんでいたらいてうは、まず綱島梁川の「予が見神の体験」と出会った。らいてうは「神の観念でなく、実在の神にじかに対面すること」²に関心を持ち始めた。

ちょうどその時、らいてうは日本女子大学の同級生木村政子の部屋で、今北洪川の『禅海一瀾』を偶然に見かけ、以下のような文字に惹かれた。

大道求於心。勿求於外。我心体之妙用。直我大道也。

知性者多。見性者少。知性則不過知天。見性則得天。

その二行の文字を見かけた後、らいてうは両忘庵で参禅し始め、「父母未生以前本来の面目」という公案を与えられた。らいてうは、年若い女性であったにもかかわらず、わずか一年少々で見性を認められた。そして「慧薫」という法名を授けられた。

三、「元始、女性は太陽であった」における禅の精神

創刊前夜「夜明けごろまでに、ひと息に書き上げ」³た『青鞜』発刊の辞「元始、女性は太陽であった—青鞜発刊に際して」は、初期『青鞜』におけるらいてうの思想を語る時に欠かせない資料である。

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。

今、女性は月である。他によって生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。(中略)私は精神集注の只中に天才を求めようと思う。天才とは神秘そのものである。真正の人である。⁴

¹ 平塚明(らいてう)「参禅してみた頃」『雲・草・人』(初版は昭和8年6月、小山書店より発行。復刻版は2005年3月、ゆまに書房)92頁

² 平塚らいてう『自伝 元始、女性は太陽であった』第一巻(1992年3月、大月書店)192頁

³ 同注2、353頁

⁴ 平塚らいてう「元始、女性は太陽であった」『平塚らいてう著作集』(1983年6月、大月書店)第一巻14頁

らいてうは女性が本来「太陽」であり、「真正の人」「天才」であったが、今は他の光によってしか輝かない蒼白い「月」であると言い、「真正の人」「天才」へ戻るには「精神集注」が必要であると説いている。ここに言う「精神集注」はらいてうの場合では座禅という方法を用いたであり、「真正の人」「天才」とはつまり「精神集注」の結果としてもたらされる見性を得た人のことである。

時々難解で、神秘感あふれるらいてうの文章は、禅の精神と成果に大きく影響されているに違いない。らいてう自身も、「もしもわたくしが、禅の道を踏んでいなかったら、おそらくもっと違った発刊の辞を書いていたことでしょう」⁵と語った。禅の世界観について、竹村牧男は次のように説いている。

禅は言うまでもなく座禅を根本とするが、座禅においては、心が統一され、三昧に入り、一心に撰せられていく。もちろん、その禅定のみでは悟りの世界が自覚されたとは言えない。そこに悟りの智慧が発して初めて本来の自己の自覚がもたらされる。しかしその事は、禅定なくしてあるわけではない。それは、禅だけでなく、およそあらゆる仏道において同様であろう。まして中国に育った禅(中略)においては、(中略)禅定の世界がそのまま智慧の世界にもほかならないという。(中略) そのように根本的な禅定の世界、その一心の世界は、無心の世界にもほかならない。そこに、物一心と相対する心のありようもないであろう。⁶

竹村牧男の言う「悟り」はつまり「見性」であろう。座禅によって「心が統一さ」れ、「智慧が発して初めて本来の自己の自覚がもたら」されるという。また、竹村牧男は禅定の世界が「無心の世界」であり、そこに「主客分裂以前の世界を直指した」ものが見られると述べている⁷。本来の面目について、らいてうは「元始、女性は太陽であった」の中で、次のように説いている。

今、私は神秘といった。しかし、ともすればいわれるかの現実の上に、あるいは現実を

⁵ 同注 2、365 頁

⁶ 竹村牧男『禅と唯識—悟りの構造』(平成 18 年 3 月、大法輪閣) 32—33 頁

⁷ 同注 6、34 頁

離れて、手の先で、頭の手先で、はた神経によって描き出された拵えものの神秘ではない。夢ではない。私どもの主観のどん底において、人間の深き瞑想の奥においてのみ見られる現実そのままの神秘だということを断って置く。⁸

男性といい、女性という性的差別は精神集注の階段において中層ないし下層の我、死すべく、滅ぶべき仮現の我に属するもの、最上層の我、不死不滅の真我においてはありようもない。私はかつてこの世に女性あることを知らなかった。男性あることを知らなかった。
9

らいてうの言う神秘とは「私どもの主観のどん底において、人間の深き瞑想の奥においてのみ見られる現実」であり、拵えたものではない。換言すれば、らいてうの言う「神秘」は、一切の虚像を見抜かした後の幻想でも夢でもない真実である。また、「女性あることを知らなかった。男性あることを知ら」なかったというのは、らいてうが、目に見える姿の違いにではなく、人間の本質に注目したからであろう。

中山和子は「元始、女性は太陽であった」が「近代の男性文化の記号性に対する、らいてうの直感的批判」であり、らいてうは「男性と同等に男性のように近代化される」ことを拒否し、『原始女性』を回復する¹⁰と解釈している。しかし、ここだけを見ても分かるように、見性によってすでに性別の枠から解放されていると自覚していたらいてうは、決して「女性原理をもって日本の近代を批判した」¹¹のではないと考えたい。『青鞥』の運動について、らいてうは自伝の中で以下のように説いている。

「青鞥」の運動というと、すぐいわゆる婦人解放と、世間から思われていますが、それは婦人の政治的、社会的解放を主張したものでなく、人間としての婦人の自我の目ざめ、その全的解放を志向する心の革命から出発しなければうそだと思っていました。¹²

⁸ 同注 4、16 頁

⁹ 同注 8

¹⁰ 中山和子『漱石・女性・ジェンダー』（2003 年 12 月、翰林書房）317 頁

¹¹ 米田佐代子『平塚らいてう—近代日本のデモクラシーとジェンダー』（2003 年 10 月、吉川弘文館）24 頁

¹² 同注 2、365 - 366 頁

らいてうの真意を無視し、単なる女権運動者、あるいは近代化の批判者に位置づけるのはあまりにも不適切であると思われる。むしろ米山禎一が指摘したように、「歴史的にそのような解釈がなされ、女性の自立と解放に寄与してきたことは確かだ」¹³が、らいてうは実際は「個人主義の理想を、男女差別の現実を自由に超脱する次元に築き、そのような理想を自ら体現していると自覚し」¹⁴ていたのだろう。

更に、「元始、女性は太陽であった」では、「円」に関する表現が多いことも見逃せない。

接吻は実に「一」である。全霊よ、全肉よ、緊張の極の円かなる恍惚よ、安息よ、安息の美よ。感激の涙は金色の光に輝くであろう。¹⁵

私どもは日出ずる国の東の水晶の山の上に目映ゆる黄金の大円宮殿を営もうとするものだ。女性よ、汝の肖像を描くに常に金色の円天井を撰ぶころを忘れてはならぬ。¹⁶

何故らいてうは「円」という表現を好んだのか。佐々木英昭は黄金の大円宮殿、金色の円天井が「ある種の理想郷、目指されている観念の象徴であるとしても、それはなぜつねに金色でかつ円形であるのか、らいてうがそれを実際に見ていた」¹⁷からと述べている。らいてうが「実際に見ていた」のは、『主客合一』底での視覚的体験である点で、それもまた見性の反復¹⁸であることは言うまでもない。しかし、どうして「円」でなければならないのか。西田幾太郎は「永遠の今の自己限定」で、「円」の概念を次のように説いている。

周辺なくして到る所が中心である円の自己限定はすべてを包む無限大の円と考へることができる。ここには動もなく生もない、それはもはや現在といふべきものでもない、そこ

¹³ 米山禎一「出発期における平塚らいてうの思想とその史的位相」『台湾日本語教育論文集』第四号(2000年12月、台湾日本語教育学会) 294頁

¹⁴ 同注13、308頁

¹⁵ 同注4、21頁

¹⁶ 同注4、26頁

¹⁷ 佐々木英昭『「新しい女」の到来』(1994年11月、名古屋大学出版会) 130頁

¹⁸ 同注17、124頁

では時といふものがなくなるのである。¹⁹

また、日種讓山は龍樹尊者の円相説²⁰を引き、悟界・仏性の象徴である「円相」を以下のよう
に解釈している。

何故に仏性の象徴として円相を用ひしかなれば、それは種種偏見、即ち有見無見、仏見
法見、我相人相、仏相衆相を越えて無相三昧に入れる結果、そこには諸相諸見なく、唯円
満無礙の心相のみ光り輝いてゐるので、その象徴として円相を画いたのであります。²¹

西田幾太郎は「円」の中では「時といふものがなくなる」と示している。つまり、「時間」
という概念が既になくなり、過去・現在・未来など時間分割の意味も失つたという。また、日
種讓山の解釈によれば、円相の中心には、「諸相諸見なく、唯円満無礙の心相のみ光り輝い
ているという。

「潜める天才」が発見された「無念無想」の状態について、らいてうは「実にここは真空で
ある。真空なるが故に無尽蔵の智慧の宝の大倉庫である。ここは過去も未来もない、あるもの
はただれ現在」²²と説いた。らいてうは「仏性の象徴」として「円」のイメージを用い、悟り
を得た後の境地が「真空なる」「無限大の円」と見たと考えるとよいだろう。また、限られた時
間と無限の永遠との違いについて、鈴木大拙は以下のように指摘している。

永遠が時間のまっただ中に切り込んだとき、悟りは得られる。それは結局、時間が永遠
の中にとけこむというのと同じことになる。時間は差別即ち分化・限定を意味し、永遠は
平等即ち無差別を意味する。永遠が時間の中に突入してゆくことは、平等と差別が互いに

¹⁹ 西田幾太郎「永遠の今の自己限定」『西田幾太郎全集』（1979年3月、岩波書店）第六巻
187-190頁

²⁰ 「龍樹尊者、南印度に至る。彼の人多く福業を信ず。尊者妙法を説いて悉く初心を回す。復座上に於
て身自在を現すこと満月輪の如し。大衆唯法音を聞いて師の相を見ず。長者子あり、衆に謂つて云く、
此の相を識るや否や。云く目未だ観ざるところ、安ぞ能く辨識せんや。子曰く此は是れ尊者仏性の体相
を現じて以て我等に示す。何を以てか之を知る。蓋し無相三昧を以て形満月の如し、仏性の義、廓然と
して虚明なり、と言ひ訖つて、輪相即ち隠る。」日種讓山「悟りの心境」『禅の本義』（昭和12年11月、
春陽堂書店）247頁

²¹ 同注20

²² 同注4、20頁

相即しあうことである。²³

鈴木大拙は「時間は差別即ち分化・限定を意味し、永遠は平等即ち無差別を意味する」と言い、「永遠」を得た者にとって、「差別」「分化」「限定」といった言葉の意味は既になくなるという。この観点を更に発展すれば、生死の問題とも関係してくる。

元々禅の教えは、善と悪・仏と衆生・生と死など相対的観念を超脱して絶対の境地に達することを本旨とし、「さうした考方は生活の総てに涉つてをり」、「此の相対的な考へ方を超脱して絶対境に到達」すると、「そこに本来の面目が躍り出」るのだという²⁴。らいてうも多数の文章でこの大きな課題を扱っている。例えば、「元始、女性は太陽であった」では、らいてうは「生も知らない。死も知らない。敢えていえば、そこに久遠の『生』がある」と言い、また「円窓より—四月の評論二三」でも、「外面的に見た老幼生死、榮枯盛衰のこの現象はいうまでもなく、現実の真相ではない」²⁵と言った。更に、塩原行の直前の心境を語った「円窓より」では、

私は何故殺されるのか、何故死ぬのか、そんなことは何にも知らなかった。また、知ろうとも実は思わなかった。私はただ殺そうということに対してそれを避けようとする念が全く動かなかった。毎々殺すというようなことを聞かされていた。はじめからきかされていた。が、いつでも私は死んでもいいような気でいた。何故だか避けようと思ったことは一度もなかった。²⁶

と言った。らいてうは、おそらく「いま・ここ・自己において、生死を脱却し、今から今へと生き」²⁷る禅の観念を理解した上で、「いつでも私は死んでもいいような気でいた」と言ったのであろう。

²³ 鈴木大拙『禅による生活』新版鈴木大拙禅選集（1990年11月、春秋社）第三巻 69頁

²⁴ 同注 20、92頁

²⁵ 平塚らいてう「四月の評論二、三」『平塚らいてう著作集』（1983年6月、大月書店）第一巻 98頁

²⁶ 平塚らいてう「円窓より」『平塚らいてう著作集』（1983年6月、大月書店）第一巻 90頁

²⁷ 同注 6、185頁

四、終わりに

以上、「元始、女性は太陽であった」を中心に、禅学の立場から『青鞜』初期における平塚らいてうの思想と禅とのかかわりを分析してみた。

日本女子大卒業前後、偶然に禅と出会ったらいてうは、見性体験から「真の自由」を得ることができた。「真の自由」は、らいてうの言葉を借りれば「ただ外界の圧迫や、拘束から脱せしめ」²⁸る制度面での改革だけではない。「潜める天才を、偉大なる潜在能力を十二分發揮させる」²⁹ことこそ、本当の目標・理想であるという。この「真の自由」への追求こそらいてうの思想の出発点であった。禅の要素が多く扱われたこの長文の歴史的意義は、女性解放宣言の段階に止まらず、それを更に越える人間の根本的問題を取り入れた人間解放宣言と位置づけたい。

²⁸ 同注 4、22 頁

²⁹ 同注 4、25 頁